

骨董集 上編 上

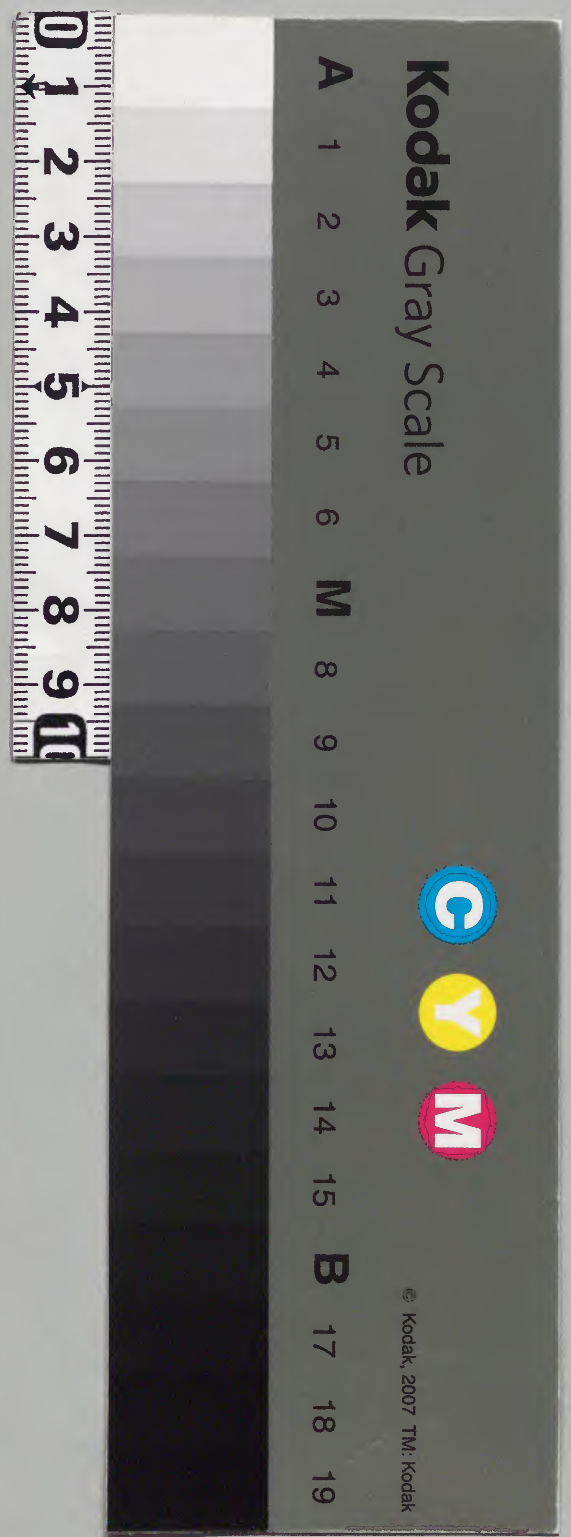
57 222

庫	文	閣	内
二	二	二	和
三	五	二	書
函	四	〇	類
架	冊	三	
五		號	

			和
	二	五	書
	九	〇	門
四	七	三	
冊	架	函	類
四		號	

内閣文庫	
番號	和 25203
冊數	4 (1)
函號	213 57

213-57



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり
糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

醒醒老人隨筆

山東庵

骨董集上編

前帙
二冊

東都書肆

文溪堂梓

霜



醒：老人積年所著小說九百。不讓
虞初。世態情實。多不道。釋文野

乘無所不窺。若夫椎輪大輅。質不勝
文。名物混淆。能哉不能。老人有感於
此。卷伍今昨。指搯誣偽。著为一書。名
骨董集。鄉儒先生或朝之云。此瑣

者。何足以辨矣。吁。大舜好察迩言。孔聖
數誦童謠。吾子知齊東野語。班氏祿街
話巷議。後世如田叔禾黍。卷叢談。胡元
瑞莊嶽季譚。皆是物也。骨董。非何
氏樓下物也。必矣。比彼不知所作之者。
移的就箭。掩耳盜鈴。則大有逞庭矣。

骨董上編上首之一

余與老人同一癖。不得不為之一解
嘲也。文化癸酉冬日。杏園主人書于
緬帷之林下。



骨董上編上首之一
杏園主人書于緬帷之林下

骨董集上編前快目錄

上之卷

- 好事之心得 [一]
- 竹馬 [三]
- 蝙蝠羽織 [五]
- 奮吉原兩日のお宿 [七]
- 奥を呼て斗ことりの [九]
- 豆腐紅葉 [十一]
- 銭湯風呂始 [十三]
- 行水船居風呂船 [十五]
- 伊勢風呂吹 [十七]
- 目黒餅花 [十九]

- 昔威儀 [附紺屋之] [二]
- 昔人之質朴 [四]
- 曹人形 [六]
- 髭男 [八]
- 粉之看板 [十]
- ころばどとのみ下踏 [十二]
- 風呂犢鼻褌 [十四]
- 石榴風呂・鏡磨 [十六]
- 金龍山米饅頭 [十八]
- 耳垢取 [二十]

骨董上編上之三

○ 臙脂繪賣 [十一]

○ かぶことりの言 [十三]

○ 浮世袋 [十五]

○ 燈籠踊 [十七]

中之卷

○ 名古屋帯 [一]

○ おばさき・おん [三]

○ 行燈 [五]

○ 女之編笠・塗笠 [七]

○ 浮世袋再考 [九]

○ 大津繪佛像 [十一]

○ 重箱・硯蓋 [十三]

○ 釜磨・猫之蚤取 [十四]

○ 駒形之螢 [十六]

○ 初雪之匂 [十八]

○ 火燧・所・地火炉 [一]

○ 挑燈 [四]

○ 笠の下は布を垂 [六]

○ 桔梗笠 [八]

○ 奥板古製 [十]

○ 浅葱椀 [十二]

○ 二足三文 [十四]

新撰六帖 五

竹馬小あはれうまれ

そのあまのよけいふれども忘れやい

九條三位入道知家

右の古歌を考ふるよ或いはあはれうまれとていひ或は杖もたのむといひ或はう

あれといひのよけいふれとていひのよけいふれとていひのよけいふれとていひのよけいふれ

庭訓 遊戯の事をあはれうまるといふ竹馬馳といふらとありたよめらりと古

畷の如く生竹を馬うて馳らるる事と異制庭訓の虎関和尚の作あれば

あはれうまるといふ下学集 騎竹之年 指不騎之童子 といひ騎竹といふも竹よ

騎戯るの謂るるべし

昔人の質朴

一代女 貞享三 一之巻小云此四十年跡よめ女子十八九も竹馬よ乗て門

小遊び男の子もさぶらして廿五よてえ服せし小あはれもせうく変る世や云々

按るよめ四十年跡といふる正保の比よめこれ正保の今文化十年よりあはれを百六十七年
わど前より當時の人情の質朴よめ小あはれうまるといふも竹馬も今のどらた竹馬といふら
はれうまるといふも竹馬も今のどらた竹馬といふら

骨董上編 上二

古代竹馬圖

此圖は元禄十三年の印本

田光大師傳のうらより

幕出せられし正和年中の

古画を摹して刻した

上和年中の今文化十年より

あはれ五百余年の

とあり昔ありあはれを



五百年の

昔のうらや

遊の情

今と

あはれ

Vertical text on the left side of the page, likely bleed-through or marginal notes.

狂畫苑 安永四年 百鬼夜行ヤミヤミの古画を

編あつらひたる其うち此畫のり歳画

あれども當時の竹馬たけうまのよめをみる便たすなり

好古小鏡こうこせうきやう小本朝畫史せうほんてうがしを合考あひあする

百鬼夜行の明德の比ひの古画あり明德の

今いま文化十年ぶん化じゅうねんよりあるを四百二十餘年の

昔むかしより物の頭ものあたまの形かたちはける竹馬の

あつらひ物あり



百鬼夜行のりて歳画の怪物
あれ竹馬よめをりたる
あつらひ物あり
唯そのあつらひを
みるのみ

骨董上編 上三

唐山たうざんの古銅器こどうき小童見竹馬せうどうけんたけうまを持たる形を

鑄いたるあり銅色宋時代そうじだいの物との鑿定さくぢやう

ありその臨本りんほんを得て竹馬のよめ

を小童のりてりこれを樂たのしむ

宣和年間せんわねんの物と

いひゆるとたり

本朝ほんてう

鳥羽院とりはにんの保安の

比ひのよめより保安

より今文化十年いまぶん化じゅうねん

よりありて六百

九十餘年ありたるをみるべし

見立みだて歳としりて檣車じやうぐるまの

樂たのみあり七歳しちさいよりして

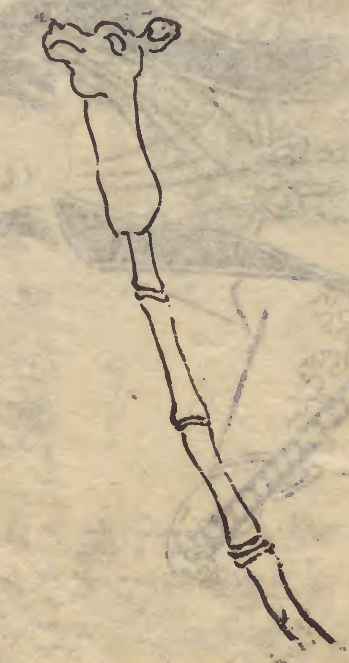
竹馬たけうまの歡たのみありて檣車じやうぐるまの

對たいしてこれ唐山たうざんのり此畫このゑの如ごとく竹馬たけうまあらん

彼かれをを參まり考かへる小生竹せうせいを馬うまよめをり

日本にっぽん様さまありん駝たの頭あたまよりくるの唐たう様さまありん

中ちゆう昔むかしよりありて彼かれをよめ



貞享五年板

日本歳時記

卷之四又此部あり



あらし紙よ
ありぬんを
赤桐よつうな
りぬんを

人形を

人形
二種



人形舟

此畧は延宝天和の
時代の繪のうら
り草画にて
微妙ありと云ふ
考證のひとく
模し

貞享五年板

○舊吉原の両中のみ

万治二年印本

私可多咄

香花園

小云

江戸

のう

れぬ

此処乃遊君は兩ある時のみ道ありきもろくはあつた
奴のせある小負てあつたあつた奥あつたんとまにま宿の門小ぬれが
たれせらんよとゆる

は井筒井づにけしるくは縄負にあらむもえざるまに

つたて遊女くしるくは縄負にあらむもえざるまに

くらぶらうあつたけくその肩は君あらむとたれらあづま

とあるよみしと也

異本洞房語圍

享保五

年ノ記

小云

和年

中元

よ

原の比

お女ごの揚屋へ通か小下男ごり小あつたて行たりかりぬれ六尺の繩をりて常は
西のものをしるくしてそのあつた小袖を足をはくみりてそを長くたして

西の膝を六尺の手のうしろのせて臂をとり衣紋ふつろひて後より長柄の傘をば
 おけさせたる袴あき品よくええし」とその其古番を摸してたふあらはせしと貞享
 元年板 **三代男** 詞花堂 藏本 一之巻小江戸三野の薄雲が揚屋入のよめをひたたる
 糸よ云 **紫立ち** 曙のうさぎもさめぬのおむらひりんつきの傘角助がさし掛
 肩で風まらしてらら〜ぬる粧の玉兩枝ある白梅落と詩人あどりの詠むは野々
 角助が背中小葉らつりぬありさぬの如末よりさふおれぬ身よりの光る
 云」とおれが吉原今の地よりつりて後も負して揚屋入あたる事あり〜歎
 ○固よ云元龜の比の高祿の武士の妻女も乗物小葉事あり〜嫁入の時も麻の
 かつきを著て負木とりのりの尻くけてう〜ろさぬ小負してゆける〜
 古老の説あり當時の質素の風をひきき〜の残したるあるべし
 ○元吉原今の地よりつりて明暦三年あり **私可多咄** 万治二年の板よと
 元吉原の時をまことりづふ二年あれば證とさふたれり

骨董上編上七

私可多咄 とりの
 草紙のうらに此繪あり
 是則元和年中
 今の大門通吉原
 あり〜時のさゆら
 今文化十年より〜りて
 一と二百年小近き
 昔あり〜袖の
 一と二百年小近き
 あり〜衣服のゆたさ
 あり〜茶髪あり昔
 質素の風解るべし
 あり〜三代男の
 あり〜手拍子
 あり〜奥書



万治二年 秋季吉日

○鬘男

見聞軍抄

慶長十九
年印本

小云

八

昔聞東より鬘男をふおもてよと鬘男こいひて
るひるゆゑに諸侍鬘を懸ひのこころは鬘と云鍾馗鬘と云諸人好む鬼鬘た
るに懸れりて記よのふ此鬘の事ありのどふれの鬘を天神鬘と武家
よのふの鬘をたのむりて云ふに似たり詞のふ小當時の風体なるべし古画をみる小
鬘ありて男子のすれり昔の鬘と云は昔の假鬘をさへさへりてとぞ云ける西鶴大鑑
よの鬘男のらと云えたり

○魚を呼て斗とりの

饅頭屋節用集

よ云 和国 兒女 呼魚曰斗と。類一説云 南朝一人

呼食為頭 呼魚為斗也」と云ふゆれば魚類をさるとりのあるま類

あま泉の塚の魚屋よ斗と屋とりの家号あるも此ゆゑあらん

石節用集ハ林邊の作あり 辨疑書目錄 植字各目の部ハ節用集 眞書本二冊 文龜本とあり 其後慶長三年の印
本ハ「斗と」を「斗」一 傳訓禁と。兒女の語ハ魚とりの芝草類 觀南朝呼魚為斗と云たり 辨疑語也と云ふと云えり

骨董上 臨上ハ

○粉の看板

あまの事

和名抄

粉

和名之路岐毛能

とん色

長明四季物語

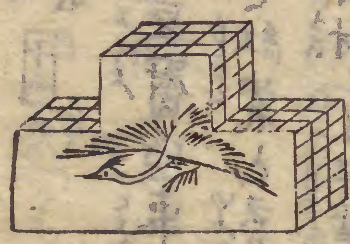
小春のみきたる

まにまに云く空のけしきよと云ふりてとあるゆゑのゆゑ小あけけける
るよと云くあまのうさなれま」とゆればあまの事ありと云ふも古に粉ありと云え祿の比
あまの看板は白鷺をさしたる事ありたよゆらつと昔の如く板にさしたる
ゆゑのゆゑと云ふ物ありて 錢湯風呂屋よ木ゆき箭をほくまゆき目ざしと
子射れとゆきを湯入といふゆゑと云ふる類ありて更し雅あり

白粉師看板

元祿三年板
人倫訓蒙書

景よええ



○豆腐の紅葉 十一

塚鑑 天和三年印本 下之巻「紅葉豆腐の事何國も豆腐のめれども別して當汁のを勝たりと古人より云傳と紅葉と云名をかたるこの塚の櫻鯛もかたらぬ味あれいとせやくとるを花と對する紅葉の縁あるべし又或人の云此豆腐を人のめりやうと祝て付たる名ともより買様と紅葉と音便成ゆ故今豆腐の上は紅葉を印と詞と就て形を顯るべし買用も通てうしめまが今豆腐の紅葉の形を印する事塚の紅葉豆腐と始まるあり紅葉を買様と取るも幼氣あれど昔此類か不也とされいと由る名詮よくとる人のよれをりて祝とせざるあり

○固小云古老の説は南天といふ木の本名南天燭あり手水鉢の下は植食物のういゝたあどにせざる諸毒を解するおあり鏡の下は敷又ハ裏小鑄付あどとる南天を難轉小取ると難を轉るとの人意とす禁厭ありといひ

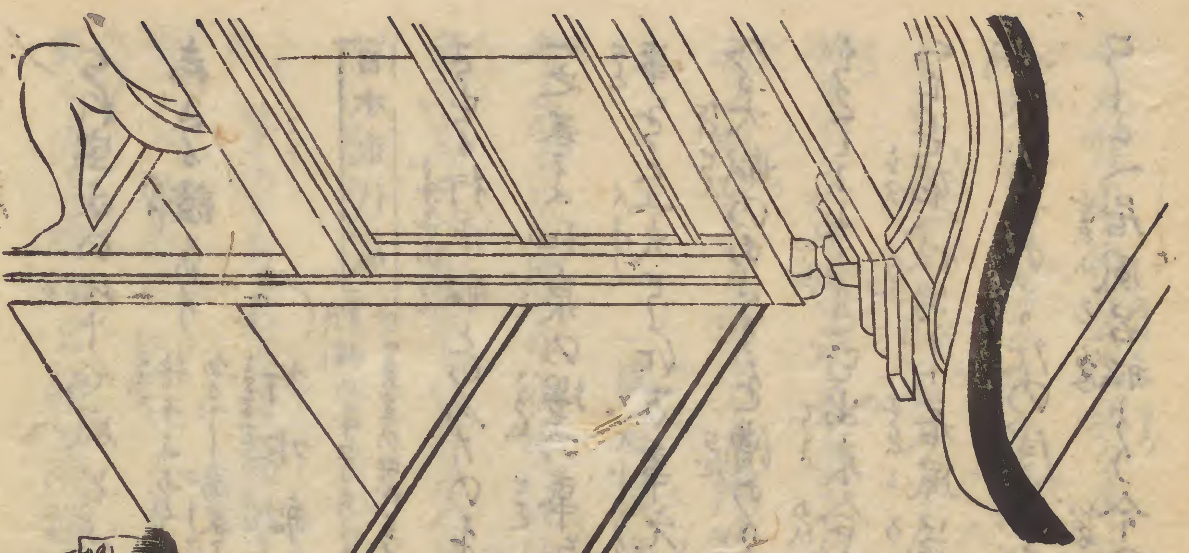
紅葉を買様小取あど此たひあるべし能の狂言鱸庵下といひ
深草の土器よらんらんぐりのあしををるとの事の前よゆり
能の狂言の古たごあり

○ころづとりの下踏 十二

文禄より寛永ののこの古画ををるよりひきた瓢箪を火打袋或ハ印籠巾著の根付と又ハ瓢箪をうりをもむびたる林をあらくまげけし傳て瓢箪をむばるの轉ざる禁厭ありとこれよりくありハ江戸の名物よころづとりの下踏のり其下踏ハ瓢箪の形を印する由原彼禁厭のゆよ事あるもあよころづとりの名をあらせあるよ中とありたるこの神のれが推當言あれどもとありひとりあふようよもあふ

○江戸銭湯風呂の始 十三

寛永十八年印本 ところろ物語 本花園 云「江戸のいじり江戸らん奉うのころづめ天



寛永正保時代鐵湯風呂古圖
 女味子ありてのこころも
 寸者乱髪をみるに由るなり美軟石の
 風呂に入毎髪を洗ふに風呂の
 不ろく妙にこれ中を洗ひぬ
 されど美軟石を洗ひぬ
 當時に男女とも髪付油を用る者
 前記の風呂の煙も霧をふかす
 附記の打たぬ路もたぬ洗髪
 五毛も一證と云ふ
 寛永正保の今と云ふ
 文化十年より
 おもて百七十年の
 昔あり

寛永正保時代鐵湯風呂古圖



其二

當時の常より
煙をたぐさる
たの遊行の
折れたるもの
幸あれども
えづら懐中せど
奴僕よりせたるもの
夫の長
きせるの頭雁の首
雁首の名目残さる
火皿の大き

一代男

巻之二
寛永の
比の風林を
五つづきの



此音の右の機湯風呂よのむる解る
男女の乱髪ハ有るもの

奴僕の名目
髪を
今と異なり

此奴僕の名目
いづれ風名敷
當時の風呂
敷物
物を
つむ
判
あつても
風呂敷の
名目
残さる

此婦人の髪
いと長

四十四上 四十二

是の
古老云寛永の比の
婦女の帯の廣
るる鯨尺の二寸
紙をひとと綿を
い
古老又云昔の
婦人の髪はかく
長れをたけよ
ゆるるるどい
やめたり
此音よ
う



男女の
髪を
今と異なり

婦人の
髪
髪
大異なり
えん

石榴風呂 附 鏡磨 [十六]

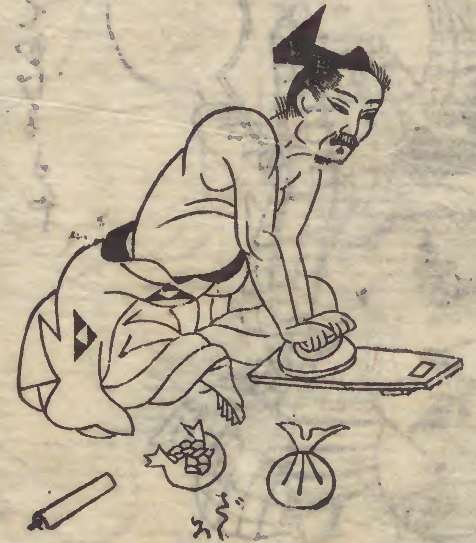
元和九年作 二之巻云いづれもあまぐさなるをいひよたりて風呂といひたり
 のあゆみたるを石榴風呂といふんぞいふやむとていふところあり醒云いづれも
 度詞あり居入といふを鏡鑄といふよりありたるあり昔の鏡を磨は石榴の實の
 醋を用ひて磨きあり今ハ梅の醋を用ひたり

七十一番職人尽歌合 心みとだの月の夜よ

水うひやとろのそむとむげあまやむとていふ月のあけくら
 繪も鏡磨のめらうらよ石榴を共たたる所とけり此歌合ハ文安宝徳のあけくら
 守武独吟千句 天文九年吟慶寺五年刻
 前ハ志やくろありけりいづれもあまぐさなるをいひよたりて風呂といひたり
 附ハ心みとださ夜の中ハもいふことんき
 かくれば天文の比ハ石榴を用たるべし是等をとりて寤今江戸の銭湯ハ石榴といふ

名目あり石榴風呂のあけくらありべし然則石榴ハ石榴風呂よりあたる名目
 ありとて風呂ハ鏡磨よりあたる名目ありあたるやあたるも参考しとて
 ありとてあたるあり

鏡磨圖



文安宝徳ハ今文化
 十年よりあたる三百
 六十年の昔あり

伊勢の風呂吹 [十七]

甲陽軍鑑 卷之九 下 天文十四年の条云「風呂いづれもあたる名目あり伊勢風呂ハ
 中子細ハ伊勢の國えりて伊勢風呂を好て能吹中子細より分て上中下ともあたる
 風呂をとりて在郷中ハ大方村一ツハ風呂一ツばくせとていふ夫のりともあたる風呂ハ

鏡磨古圖

甲馬一あがたらんとらんもどろえ縁三年板人倫訓蒙番
 画風をどと考ふよ此繪ハ貞享え縁のちめのも
 鏡磨まのすけり秋のちやりとりのくよ根を合て
 砥の粉をよやく梅酢よとよとあれが當時ハ
 石搦り用さるべし古画よりとづたてゆひるナヤ



骨董上編上十四

同よえ鶴岡職人尽秋合

「後うらうらひと草を
 たりとてちちうらひが
 ありのげもろ」
 それハ昔酢醬草の
 醋をゆらひてあをを
 磨たさるもありの
 まん



蘭奇縮尾

江戸鹿子

貞享四

米饅頭屋浅草金龍山ありとや同所鶴屋とあり

江戸咄

先板の故郷故江戸咄と題を後増補し元禄七年の本あり

巻之五の真土山云々交の山の麓のいひまんぢう

江戸中よりいひまんぢうといふものたり云々

享保の比の板江戸八景の繪本は金龍山聖天に二王門ありて

ひびきありていひまんぢうの産あり近江せすも其のいひあり

延宝六年板菱川の繪本は此辻賣の圖あり



風童上編上十六

江戸鹿子

真土山の茶の坂の登り又聖天町の門前

此麓に伊勢屋の饅頭の名物ありとて

いひまんぢうといふもの

とめられ伊勢屋と

名物 米饅頭 金龍山

江戸鹿子

○日黒のいひまんぢう

享保年中印本
江戸名所百人
一首之繪

月くらみさう



かみさうのなま
みちのしんがら
うたれたま
月くらみさう
これまにかうけ

目黒の餅花

十九

昔月黒不動尊の門前... 餅花... 目黒の不動尊の境内... 江戸八百箇 延宝六年板

附ウ 目黒の原の大がとひはく 青雲 来雪

延宝の時... 目黒の不動尊... 餅花... 江戸名所百人一首の繪草紙... 上よめらるる

耳の垢取 三十

江戸鹿子 貞享四年板 耳垢取 神田紺屋町三十目長宣とありぬるが北京あり

京羽二重 貞享二年板 耳垢取 唐人越九兵衛とあり 初音草啖大鑑 元年板 巻之

五よ 京と江戸もたゞどがある通町のはくをうればあひ歯ぬれ耳の療治

云く 老人養草 正徳六年板 云く 近末京師の過く耳垢取と紅老人のめくらと似て

云く とのれがえ縁の末正徳の比まもめりあるべし

観音で耳をわらうてふとくぎん 其角

此もも耳垢取のらうとつるあるべし

一代男後日 刻板の年号あり按よ西鶴が廿五年の二巻よま 松浦淳平戸との所

とづらある草の屋をわらうて云く 髪を惣あをけあうて長崎一官と名をと

は死都心と云る耳の療治人の似とすて京の一官類と云くは且不當時京

よ一官との耳の垢取ありあらん

耳垢取古番

亡友大朝此番を
横して予よのふ
按よられえ禄多ふ
の繪あるべ



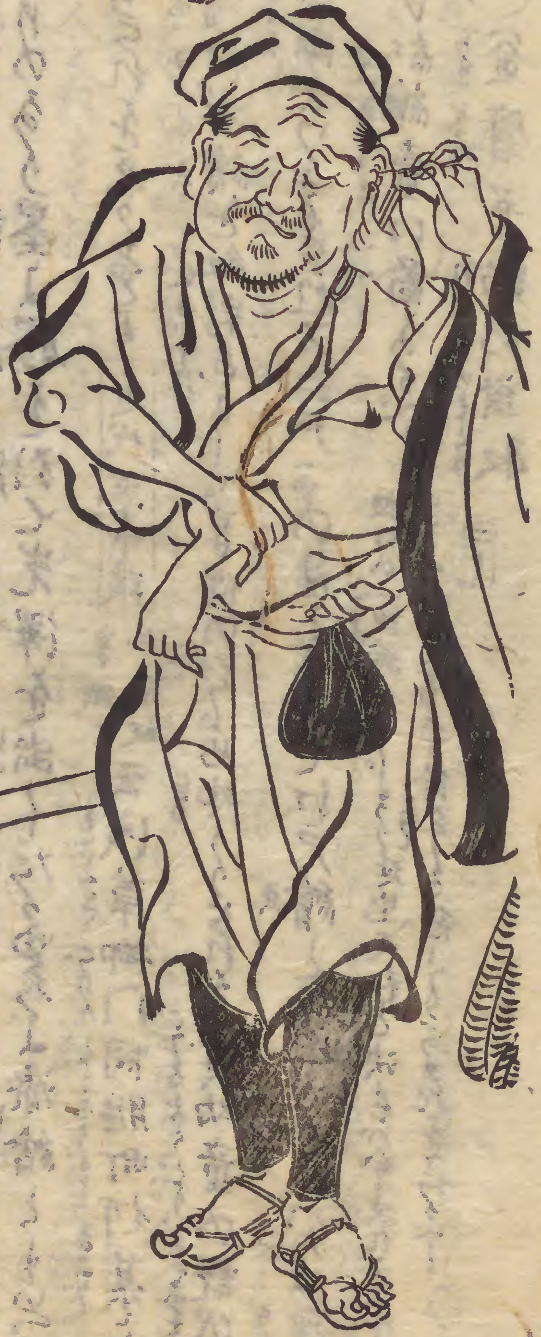
手紙をおかき
うたふりあり



骨董上編上六

英氏画譜

耳垢取の番
ゆれい草画を
微細もらひありあり
此番も異ありあり



○熊脂繪賣 三十一

按よ板行の一枚繪の延宝天和の比始れる牧朝比奈と鬼の首引土佐淨瑠璃の繪
荒の塚入の繪の類之芝居の繪の坊主小兵衛を多けけるものと其始あるべし當時の
丹緑青あどよくまじりたる彩色一たり菱川師宜古山師重等これを画けり元禄
のころより丹黄汁を彩色とこれを丹繪といひ元禄のころより鳥居
清信其子清倍等これと画けり宝永正徳小至て近藤清春出たり紅繪と云ひ享保
のころめ創意のあり墨膠を引て光澤を出したるもの多し漆繪ともいふ
奥村政信められこれを多けり近世世事談 享保十 九年板云浅草御門同朋町竹某といふ
者板行の浮世繪役者繪を紅彩色めり享保のころめ比うこれを賣幼童の貌びと
して京師大坂諸國よりこれを又江戸の産とありて江戸繪といひこれのあれは摸
出の享保の比の紅繪賣の首あるべし 板行の一枚繪のころより延宝天和と決まらば今文化十年よ
りして百十年餘年を経りたるをみるべし

○金磨并猫の髪取 三十二

骨董上編上十九

西鶴織留

三之巻云云たる一年の師走に寛の上塗を仕よるるを手よりの
事と思ひし又その暮の達者ある男が金みかたにありきり大釜五丈其外
大小にやらば三丈ば也云々前よ人をりし者も猪子よ云々又五十ちの男
風呂敷をうらりて猫の髪を取まると声立てたりける隠居がの手白三毛を
うらりし人それと頼まれたる一疋三丈ば極め若巻取りたる猫湯を
めて洗ひぬれ身を其も狼の皮よけみてきつ抱けらうらら髪もぬれたる
呀をうらりて狼の皮よけりけるを大道へあひ捨ける是程の事もその
も何とて分別仕出牙の種ありぬ云々 猫の髪うらりし者あり

右の織留の西鶴の遺稿を正徳二年刻せるあり門人團水の序は半書遺して
その西の葉月よ此をたまぬといふ元禄六年の右の書中元禄二年あるを時をあらん

西舞ののき

元禄十 七年板の序よ云大坂の西鶴が咄よりいひ風呂敷つとせせめあらしにめりて猫の
髪とらりと口過する者ありと語られ云々 西舞ののき

都歳時記 序の延宝二年とあり 卷之四云長谷岩藏花苑より六字の念仏より符を符さぬの

花をわづり巧をほじしたる四角ある灯笼を戴てをぐるがれも肝よりしたるひと

まゐめて品あるの都ももどらどありは此所より氏神の前より踊らぬ其年

みまるとたる亡者の家より行て夜更をもとどとありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありありありありありあり

目次紀事 云洛北岩倉花園両村少年の女子各大灯籠を戴八幡の社前より聚

て男子大鼓を撃手笛を吹踊を勤む是を灯笼踊といふ所戴頭上の灯笼踊る

女子の家より春初よりこれを造る互に其作る所の模様を秘と 京書漢文 今更なるを 右よ

骨董集上編上之巻終

骨董上編上之巻三

醒醒老人著

京價

備書 上巻 嶋岡長五 中巻 橋本徳瓶

刷入 名古屋治平 鈴木榮次郎

○骨董集上編

後帙二冊

來乙亥春發行

○同 中編 二帙四冊

○同 下編 二帙四冊

追二出版

加減朱子讀書丸

一包 氣をんをほくくおあがえをくく心腎のまをんをかきよめ 一匁五分 生れつきよくく多病の人用て 老若男女よあきくくをきよめ

つらむ心をつく人いあひの病を生んで天寿をそとあひをくけはあを用て心腎をあきよめ べし 旅行したくして益多し 江戸京橋南山東老店

印章篆刻

玉石銅印古体近体りとも麻びろく石上刻一字 一匁次刻一字朱文七分白文五分大印は限あり

京山人百樹

山東庵主人著

雜劇考

前編 二冊 古代の雜劇を考へめらるゝ
後編 二冊 古画古圖を載り

近刻

文化十一年甲戌冬十二月發行

天保七丙申年春季吉日求版

東都書肆 文溪堂 丁子屋平兵衛梓

大傳馬町二丁目

和漢印章考

京山岩瀬百樹著

全六冊近刻

骨董上編

